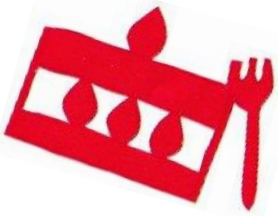
だいこく通信　第五十七号「春の号」

ごあいさつ

今年、東京では二月十五日に春一番が吹きました。去年よりも十四日も早いそうです。季節の変化がめまぐるしくなっていきそうですが、時の流れに押し流されないよう、気持ちを落ち着けて過ごしたいものです。

社報「だいこく通信」第五十七号をお届けします。今回の内容は、神社に関する豆知識をお伝えする「お宮あれこれ」、オリジナル・キャラクターたちが活躍する連載まんがなどです。お楽しみいただければ幸いです。



大國神社の今

○だいこくクラシックスを開催しました

去る一月二十七日、本殿にて「第六回だいこくクラシックス中山良夫　五弦ヴィオラリサイタル」を開催いたしました。令和二年十月に開催を予定しておりましたが、新型コロナウイルスの影響で延期となっていたものです。元東京都交響楽団ヴィオラ奏者の中山良夫さんによる、珍しい五弦ヴィオラのリサイタルです。全曲J・S・バッハによる作品による意欲的なプログラムで、幅広い表現力をもつ五弦ヴィオラの魅力がいっぱいの、充実したひとときでした。中山さんご自身による解説も交えながら、バッハの音楽の奥深さを味わわせてくださいました。

だいこくクラシックスは今後も継続して開催する予定です。どうぞご期待ください。

○ご朱印スタンプをリニューアルしました

長く使用してきました参拝記念のハンコがかなり摩耗してきたため、デザインを一新しました(写真上)。合わせて、大吉うさぎのスタンプも更新しました(写真下)。

お宮あれこれ～月のはなし～

お宮にまつわるさまざまな話題をお伝えしているこのコーナーですが、今回から不定期でいろいろな星を取り上げてみようと思います。今回は第一回目として、わたくしたちにもっとも近い星である、月についてお話しいたしましょう。

月は地球の衛星で、大気はなく、玄武岩でできているそうです。地球からみた月と太陽との位置によって、月の輝く部分が変わって見えることによって、満ち欠けが生じます。月は満ち欠けを繰り返すところから、古来、神話や伝説を生み、また詩歌の題材となってきました。「花鳥風月」「雪月花」といった言い方に、月が自然の美の代表としてとらえられていたことがあらわれています。

月は、古来さまざまに呼ばれてきました。『日本国語大辞典』からいくつか挙げてみましょう。

つく、つくよみ、つくよみおとこ、つきひと、つきひとおとこ、かつらおとこ、ののさま、つきしろ、月輪、月霊、月魄（げっぱく）、月陰、太陰、陰魄、玉輪、玉魄、月兎（げっと）、玉兎、玉蟾（ぎょくせん）、蟾蜍（せんじょ）、蟾宮、桂月（けいげつ）、桂輪

「つく」は奈良時代の東国、つまり関東のことばです。月の神様のことを「ツクヨミ」と言う例が、「万葉集」にもみられます。方言は古い時代のことばを残すと言われますので、「つく」も「つき」の古い形だといえるでしょう。

「太陰」は「太陽」に対していうことばです。月の満ち欠けによって日を数え、太陽の動きで季節を調整する暦を「太陰太陽暦」（「太陰暦」あるいは「陰暦」ともいいます）といいます。日本では明治初期までこれを用いていました。月の神様の「ツクヨミ」は「月読み」ということですが、「読む」は数えるという意味です。ちなみに、「こよみ」はもともと「か（日）＋読み」という意味です。

陰暦で月の最初の日は新月です。しかし、新月は見ることができず、月の三日目に三日月となって初めて見ることができます。そこから遡って二日前が新月、つまり月の一日目だったとわかります。なお、月の第一日目の「ついたち」は「月＋立つ」で、「立つ」は始まるという意味です。

「月兎」は、月に兎がいるという伝説による呼び方です。この伝説は、月の表面に見られる斑点、月の影を兎に見立てたもので、中国・インド・モンゴル・中央アメリカに見られるそうです。日本へは中国から入ったのだろうと考えられます。

「玉蟾」などの「蟾」はひきがえるのことで、月の中に三本脚のひきがえるがいるという伝説による呼び方です。「後漢書」には、西王母（せいおうぼ）の秘薬を盗んだ姮娥（こうが）という女性が月に逃げてひきがえるになったという伝説が記されているそうです。

「桂月」「桂輪」など「桂」の文字が入ったものもあります。これは、唐の《酉陽雑俎（ゆうようざつそ）》にある〈月中に桂（かつら）あり……高さ五百丈，下に一人ありて常にこれを斫（き）る〉という伝説によるものです。「丈」は「尺」と同じく約3メートルですから、とてつもなく高い木があると考えられていたことがわかります。

「十五夜」は陰暦で毎月十五日の夜のことをいいます。特に陰暦八月十五日の夜は、月見に良いとされ、「中秋の名月」「芋名月」などと呼ばれます。「芋」は里芋のことです。秋の月見は、古い時代の収穫を祝う祭から始まった習慣のようです。この月見の習慣から、俳句では「月」は秋の季語とされます。

十五夜のほか、決まった月齢の夜に集まって月が出るのを待つ習慣がみられます。「十三夜」「十九夜」「二十三夜」などがあります。安産や病気平癒を祈願することが多く、月の満ち欠けが生命力に深くかかわると信じられていたためでしょう。

漆黒の夜空に明るく輝く月は、古代の人たちにとっては何とも神秘的な存在だったと想像できます。いろいろな伝説が生まれたのも自然なことでしょう。そんな月ですが、今年一月二十日、JAXA（宇宙航空研究開発機構）の小型無人探査機「SLIM」が日本初となる月面着陸に成功しました。月について、これからさまざまな知見がもたらされることが期待されていますし、月に対する関心も高くなると思われます。改めて月を見て、いろいろ思いを巡らせてみるのもおもしろいでしょう。

なお、本神社社務所ではこのたび「月見守り」の授与を始めました。月をかたどったおまもりで、中ほどにあいている穴をのぞいていただきますと、餅つきをする兎の姿がみられます。お参りの際はぜひお手に取ってご覧くださいませ。

参考文献　［ジャパンナレッジ利用］『日本国語大辞典』『日本大百科全書』『世界大百科事典』

祭礼・祈祷などのご案内

○次回甲子祭
　令和六年四月三十日（日）　午前五時～正午

○開運千人講祈祷祭　毎月一日　午前六時～正午まで

○諸祈祷受付　　商売繁盛祈願、心願成就祈願、厄除け、お宮参りなど、随時祈祷を行なっております。

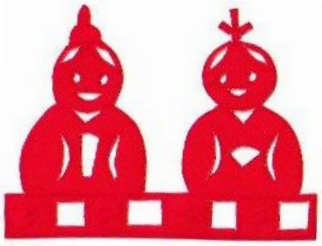
○お祓いのお申し込み・お問い合わせなどは次ページの電話番号もくはメールにてお願いいたします。
　不在の場合は、恐れ入りますが、留守番電話のメッセージのあとで、お名前・お電話番号・ご用件をお話しください。のちほどこちらからご連絡いたします。

（連載まんが）

大吉うさぎ

～神社豆知識　その16～

くま　こまち　作



〈お問い合わせ・お申し込み〉

携帯　〇八〇―一九八七―八七一六

eメール　daikokujinja@gmail.com

次号発行予定

「だいこく通信第五十七号」、いかがでしたか。次号「夏の号」は、令和六年六月二十九日甲子祭に発行予定です。

「だいこく通信」第五十七号　令和六年三月一日発行

編集・発行　大國神社社務所

〒一七〇―〇〇〇三　東京都豊島区駒込三―二―十一

http://www.daikokujinja.org